



TITLE:

# 吉村教授逝く

AUTHOR(S):

大橋, 隆憲; 井上, 晴丸; 奥田, 東; 住谷, 悦治; 西野, 勉;  
沢田, 徹

---

CITATION:

大橋, 隆憲 ...[et al]. 吉村教授逝く. 経済論叢 1966, 97(2): 225-233

ISSUE DATE:

1966-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/133116>

RIGHT:

# 經濟論叢

第九十七卷 第二號

---

## 哀 辭

故吉村達次教授遺影および原稿

|                       |         |    |
|-----------------------|---------|----|
| 国債発行と金融政策 .....       | 中 谷 実   | 1  |
| アージリスの組織理論 (1) .....  | 田 杉 競   | 16 |
| 貸借対照表という用語の創出過程 ..... | 高 寺 貞 男 | 30 |
| 独占価格と生産価格 .....       | 松 石 勝 彦 | 51 |

## 記 事

吉村教授逝く

追悼文 (池上 惇 林 直道 松井 清)

追憶談 (坂寄俊雄 稲垣 武 原田篤己)

故吉村達次教授略歴・著作目録

---

昭和四十一年二月

京都大學經濟學會

## 記 事

## 吉村教授逝く

吉村達次教授は、昭和41年1月21日午後7時45分、くも膜下出血のため逝去された。享年49才。

吉村教授は、昭和17年9月京都帝国大学経済学部を卒業、昭和23年6月京都大学経済学部に進えられ、助手に就任、昭和25年6月に助教授にすすみ、その間経済変動論などを講議されてきた。昭和41年1月には教授に昇進、新学年度からは経済原論の講義を担当される予定であったが、そのやさきに急逝されたことは、まことに惜しみてもあまりあることである。

吉村教授は、恐慌の研究において輝かしい業績をのこされたが、学部学生の教育、大学院学生の指導においても、その功績ははかりしれぬものがある。

吉村教授は、研究と教育に尽力されたばかりでなく、学問と研究の自由を守り、また研究条件を確保するため、献身的な活動をすすめられてきた。吉村教授の死をはやめた原因の1つが、このような多面的活動による過労であるとするならば、まことに申し訳けない次第である。

さらに吉村教授は、京都大学経済学会評議員として本会発展のために尽されてきたこともまた大であった。

吉村家では、1月23日自宅で告別式をおこなわれたが、京都大学経済学会では、吉村教授の学問、業績をしのび、1月31日、つぎのとおり、法経第7教室において、追悼会をおこなった。

故 吉村達次先生追悼会  
会 次 第

1. 開 会  
1. 黙 禱  
1. 弔 辞

|           |       |     |
|-----------|-------|-----|
| 京 都 大 学   | 奥 田   | 東 殿 |
| 京 都 大 学   | 大 橋 隆 | 憲 殿 |
| 同 志 社 大 学 | 住 谷 悦 | 治 殿 |
| 立 命 館 大 学 | 井 上 晴 | 丸 殿 |
| 大 学 院 会   | 西 野   | 勉 殿 |
| 同 好 会     | 沢 田   | 徹 殿 |

## 1. 追悼講演

## 略歴および業績

|                |     |    |
|----------------|-----|----|
| 京都大学経済学部       | 池 上 | 惇殿 |
| 故吉村氏の学問をふりかえって |     |    |
| 大阪市立大学経済研究所    | 林 直 | 道殿 |
| 故吉村氏の人格を偲んで    |     |    |
| 京都大学経済学部       | 松 井 | 清殿 |

## 1. 追 憶 談

|          |            |
|----------|------------|
| 友人代表     | 坂 寄 俊 雄殿   |
| 教え子代表    | 稲 垣 武殿     |
| セミナー学生代表 | 原 田 篤 己殿   |
| 1. 遺族挨拶  | 吉 村 久 美 子殿 |

## 1. 献花および黙禱

## 1. 閉 会

主催 京都大学経済学会

会場には、白菊で飾った清楚な祭壇に、遺骨が安置され、その上方に、教授の遺影がかかげられた。午後1時15分、堀江英一教授の司会で開始、会がすすめられ、御遺族吉村久美子氏の御挨拶ののち、遺族を代表して吉村百合子、学部を代表して大橋隆憲、職組を代表して中川好昭、大学院生を代表して浪江蔵、学生を代表して沢田徹の各氏が献花、全員黙禱のうちに、午後3時半とどこおりなく終了した。

学内外からの参加者約400名にのぼり、厳粛な追悼会をおこなうことができたことは、御遺族、弔辞・追悼文をいただいた諸先生、諸先輩をはじめ、参加者御一同、弔電（30通）をいただいた方々の御厚情の賜ものであり、深く感謝する次第である。

つぎに、弔辞、追悼講演、追憶談を収録する。

## 弔 辞

経済学部教授吉村達次博士の訃報に接し京都大学を代表して心から哀悼の意を表します。故吉村教授は私から申し上げるまでもなく、学究者としても、教育者としても、自己の学問的良心にあくまで忠実であるうと努力された方であり、そのためには一身上の毀誉褒貶にはまったく意を用いない方でありました。そして、それ故にこそ多くの人々から慕われておられたのであります。

京都大学は、権力からの学問の独立という精神によって建学され、学問的にして、しかも進歩的な学風を今日まで守り育てて参りました。吉村教授の生涯は、この京都大

学建学の精神をうけつぎ発展させる上で大きな足跡を残されたものといわねばなりません。49 才という円熟の時期に教授を失いましたことは本学にとりましてまことに大きな損失であります。

思うにわが国大学の現状は、その研究・教育条件において不十分であり、教官の公私にわたる生活のあるべき裏づけの点で欠くところきわめて多く、あまつさえ大学をとりまく社会環境は、大学人をして心安らかに、その本務に専念するを困難ならしむるところ多大のものがあるといわざるをえません。今日わが国の大学は、教官の過重な勤勉と不当なまでの自己犠牲においてようやくその存立を保っていると申してもいいすぎではありません。私は本学総長としてかかる大学と社会の現状が、吉村教授の死を招いた一因ではなかったかを心から恐れるものであります。これを機会に、かかる状況にたいする関係各方面の自覚と反省を切望する意を、ここに表明することをお許しいただきたいと思います。

願わくば故吉村教授の同僚、後進、知人、友人、ともどもに教授の業績と精神をひきつがれ、京都大学建学の精神の一層の発展のために努力されんことを、そして、これこそが、故人に対する最大のはなむけであろうと信じます。

吉村教授 安らかにやすみ下さい。

1966 年 1 月 31 日

京都大学総長 奥 田 東

## 弔 辞

吉村教授の御逝去に際し、京都大学経済学部を代表して心から哀悼の意を表します。

吉村教授 あなたは研究生生活の上でも、教育の面でも、一貫した信念の人というにふさわしい、自分の経済学研究から得られた科学的結論をつらぬきとおし、権力や、財力からの誘惑には一切応じないだけでなく、苦しめられ、抑圧されている人々に対して限りない愛情をもって接してこられました。そしてそれ故にこそ多くの人々の敬愛をあつめられたのであります。

吉村教授 あなたは研究生生活の出発点に理論と実践の統一という根本問題を提起され、生涯をかけてこの課題にとりくんでこられました。また、あなたの恐慌論研究における再生産の諸条件と平均利潤法則の二律背反という創意ある着想、経済学方法論における具体から抽象へ、抽象から具体へという認識の発展過程のとりえ方と、従来の抽象的で閉鎖的な経済学体系に対置するに具体的で、開放的な経済学体系論を展開されたこと、これらは戦後経済学界の重要な成果として他の多くの業績とともに残り、発展させられてゆくのでありましょう。

あなたが、このすぐれた業績の上に立って経済学部経済原論の講義を担当され、河上先生以来の原論講義のすぐれた伝統を発展させ、京都大学経済学部の発展により一層貢献されることを私達は切実な願いをこめて期待しておりました。教授としては遂に一度も教壇に立たれないまま私達から去ってゆかれたことを私達は本当に残念に思い、また悲しく思います。しかしながら、あなたはあなたのすぐれた信念の力によって多くの学究、多くの社会人、学生の心の中に進むべき道を示す道標を残して置いてくれました。この道標に導かれて、私達は力をあわせ、相共に困難をのりこえて前進することを誓い、御霊前に捧げる言葉と致します。

1966年1月31日

京都大学経済学部長 大橋 隆 憲

## 弔 辞

吉村達次さん 一昨年あなたと中国へまいりました。京都に日中経済学交流会が松井教授を中心にでき、中国科学院からお招きをうけました。元来ならば松井教授が一番先にいかれるはずであります。いろいろの事情で、松井教授はおいでにならず、わたしどもがまいることになりました。私はいちばん年上なので、私が団長ということになり、豊崎稔教授、小椋広勝教授、それから吉村助教授の四人がまいることになりました。訪中にさいして、吉村さんは一切の世話を一手に引受けてやってくださいました。

吉村さんをご承知のように非常に痩身鶴のごとくでありました。けれども本当によく責任をもってやっていたされました。私たちはなにかといえ、すぐ吉村さんにいろいろお頼みしたというわけであり、始終一貫して吉村さんのお世話になったのであります。そして吉村さんの学問については、もう私たちがいうまでもなく、京都大学の先生がたがよく知っておられますし、学界においてすでにその水準の高さが知られておられるわけであり、今さら申し上げることはありません。

中国にいて、それぞれの学会で講演をしたのでありますが、吉村さんは北京市経済学界、それから中国人民大学、北京大学、中国科学院哲学・社会科学部と経済研究所の共同主催によります学会で報告されました。報告は、「資本論」のなかの均衡論、不均衡論、それから「資本論」の中にある平衡的法則というような問題についてでありましたが、1964年6月19日の午前9時から2時間くらいにわたって講演されたのであります。非常に小さい、おとなしい声で、理路整然として、「資本論」のなかのもっとも困難な問題について講演されました。そのとき中国の学者からいろいろと質問がありましたが、それにたいしては明解に、しかも謙遜にお答えになりました。吉村さんは、日本の学界の水準の高さをしめされました。また、中国经济研究所の所長孫治方先生——孫先生も

若く、吉村さんと同じくらいかも知れませんが——と非常に熱心に質問、討議されました。このことについては、豊崎稔先生、小椋広勝先生がよく存じておられます。私は吉村さんが講演された、そのときの講演会の前売入場券を取っておいたのであります。もし吉村先生のご家族がそれをおもちでなければ、わたしにとって記念のものであります。が、さしあげたいと思って、ここに持ってまいりました。

本当に吉村さんは、わたしたち一行のうち一番若かったのですが、いろいろとむづかしい問題を全部背負わしてしまったことになり、あまりに吉村さんに重荷をかけすぎたのではないかということ、いまわたくしは本当に心苦しく存じております。本当に責任をもって、南京大学、広東大学、北京大学、上海の大学、その他との交流、若い経済学者の交流について、いろいろと交渉をしてくださいました。今後の中国との学術交流にとって、吉村先生の隠れたる功績は非常に大きいことを申し上げたいと思います。

吉村さんのような優秀な学者を学会から失ったということは、実に残念であります。しかし吉村さんの書かれたものは、すでに残っており、その方法もはっきりしているでありますから、わたしたちはそれについて学ぶことができるのであります。

吉村さんは本当に短い生涯でありましたけれども、よく勉強して、いい業績をあげてくださいましたことにたいし心から敬意を表する次第であります。

1966年1月31日

同志社大学総長 住 谷 悦 治

## 弔 辞

吉村さん 1966年というきびしいこの年がはじまってわずか21日目に、あなたを失なおうとは思ひもかけませんでした。わたしはいまだにそのことを信じることはできません。やや前ごみの長身、しぶい風貌にたたえられた人なつこい笑みは、いままあざやかにわたしの脳裏にやきついています。今日ももう決してあなたのお姿をみることのできない校庭に立っていたのですが、「井上さん」とあの特徴のある声でよびとめられそうな幻覚にとらえられるわたしでした。でもこうしてこの祭壇にたってもう再びよみがえってはいただけないあなただと思ふと素漠たる思いがいたします。

あなたはマルクス主義者としてどんな困難にも屈せず終生つらぬき通してこられました。学問の世界のきびしさに真摯に立ち向われたばかりでなく科学運動をはじめとする多面的な実践活動の面にも瞬時のゆるみもなく献身されました。安易な流行の理論にまどわされずマルクス理論の純潔をまもり発展させることにすべての情熱をそそいでおられたお姿は、われわれをはげまし叱咤してくださいました。また倒れる寸前まであなたが身を粉にしておつくしてくださいました科学者の全国的組織もいまやっと実を結びはじ

めました。あなたはわれわれにとってあらゆる面でなくてはならない人でした。今にして思えば、体がむしばまれていたのにあなたは不平一ついわずに常にわれわれの先頭になってくださいました。そのあなたにわれわれは甘えすぎてあなたを過労においやったことも少なかったのではないかと悔まれます。

われわれの立命館大学でもあなたには一方ならぬご迷惑をかけました反省をこめながらここにつつしんで御礼を申しあげます。あなたにはもっと早くみんなしていたわりの心を示すべきであったのに、今となってはもう取りかえしがつくものではありません。われわれみんながあなたの目ざしておられたことを力を合わせて実現して行くことがわれわれ残された者の責務だと考えます。あなたの生き方を力強く支えてこられた奥さんやまだ成年に達しておられないお嬢さんのことがあなたにとってどんなに心残りだったろうと思います。残されたわれわれはご遺族の方々に対して及ぶ限りのいたわりとはげましを続けていくことをあなたの霊に誓います。

吉村さん 静かにねむってください。

1966年1月31日

立命館大学経済学部長 井上晴丸

## 弔 辞

吉村先生ノ 残念です。1月3日の夜の出血以来多くの人達が望んだ全快への望みも空しく、21日の夜、ついに世を去られました。

日頃先生からは研究上、活動上の指導をうけてきた我々京都大学経済学研究科大学院生一同残念でなりません。先生から教えるを乞うべき問題は、その範囲において、その深さにおいて、まだまだ多く残されており、まさに、これからもっともっと指導願わねばならないと思っていたのに、かくも早く世を去られようとは痛恨の至り、言うべき言葉もありません。とくに、先生のゼミナールで研究してきたものは、先生の死によって生じた研究上、活動上の空隙をいかにして埋めるべきか茫然自失の態であります。

思えば、先生のゼミナールには毎年多くの大学院生が参加し、経済学上の諸問題について激しい議論を展開してきました。先生は口数の少ない人でありましたが、議論が我々大学院生の水準をもってしては袋小路に入り込んでしまった場合など、必ずその重たい口から深く掘り下げられた問題点の解明を聴くことが出来たものであります。また、先生の家にも何度となくお邪魔し、研究と実践の問題、研究者の組織、大学院運動等について色々と問題をふっかけ、その重たい口を開かせて先生の経験からにじみ出る話を聴いたものであります。先生をはさんで酒を汲みかわし、他愛ない話に興じたことも思い出されます。



今、我々は先生の研究上の業績について評価を下すというような資格は全くありません。しかし、20数年前、天皇制ファシズムによって日本の人民が帝国主義戦争に巻きこまれつつあった学生時代の反戦活動に始まる社会的実践の経歴、ゼミナールやその他色々の場面でなされた話、及び、著わされた諸論文の中から、我々は、先生が一貫して「理論的發展に対する実践活動の決定的な役割、理論に対する実践の優位」という科学的経済学が依拠すべき基本的命題を、その研究生活に具体化し、その研究内容に内在化しようと努力され苦闘されてきた跡を見、そこから我々は、今後の我々の研究に対する姿勢について大きな教訓を得なければならないと思います。

この1、2年を見ましても、一昨年は日中経済学交流会のもとに社会主義中国の見聞に出かけられ、昨年夏は第11回原水禁世界大会国際会議に日本代表として参加され、昨年秋からは日本科学者会議の京都での組織化に挺身されていたことは、社会的実践の優位という命題の研究生活への具体化であったと思います。また、その理論の中で、資本運動が単なる円環運動ではなく「円環の出発点とその復帰点であると共に、新しい円環運動の出発点であるところの螺旋運動」であることを強調され、認識を通じて理論化されるべき資本主義の運動法則は、循環的運動の内に移行の運動を内在化せしめたものでなくてはならないのであって、しかも、その移行の運動は単に封建制から資本制への移行のみならず、資本制から次の社会への移行をも含むものであり、その上重要なことは、単に新しい社会の物質的諸前提の形成を明らかにするにとどまらず旧社会変革の革命的主体の形成を明らかにすることでなければならない、と強調されましたことは、まさに科学的経済学の精髓を正しく継承されたものであり、「理論に対する実践の優位」の命題の研究内容への内在化の賜物であったと思います。我々は、必ずやこの精神に学び、20世紀後半という世界史の大きな転換期において、歴史創造の実践活動を基礎に、現在取組んでいる我々大学院会の運動を更に発展させ、そこから鋭く提出される問題意識を深く掘り下げる態度を身につけ、将来にわたって疲れを知らぬ研究者として自らを鍛えてゆくことをここに固く誓いたいと思います。

先生、残念です。しかし我々は誇りをもって先生を、河上肇先生以来培われてきたこの京都大学経済学部の真理の追求のためには何物をも恐れない精神的土壌の中に、深く埋葬したいと思います。我々とあとにつづく大学院生は、その土壌の中から必ずや先生が追求されたかの命題の精神を吸収し、世界と日本の歴史に責任を持つ研究者としてたくましく羽ばたいてゆくであります。

1966年1月31日

京都大学経済学研究科大学院会代表 西 野 勉

## 弔 辞

吉村先生。先生が急におなくなりになり、先生の教えを受けた私達は、非常に悲しくまた残念でなりません。1月3日に御病氣になられ、その後は回復に向っておられるとお聞きし、再び大学に元気なお姿をお見受けする日も近いことと思っておりましただけに、この悲報はとても信じられませんでした。

先生御自身がなされようとしておられたお仕事、また、経済学界が先生に期待を寄せていたお仕事は、沢山ありましょう。険しい多難な学問の道を一步一步展望を切り開きつつ進み、強い確信をもって営々と努力してこられたその途中で倒れになり、先生もさぞ残念なことでしょう。

しかし、古村先生。先生はすでに学問の面において、著書「恐慌論の研究」をはじめとするマルクス主義理論経済学に関する幾多の業績を残され、社会的活動の面においても、職員組合や日本科学者会議、あるいは原子爆弾禁止科学者の会での運動にみられるように、わが国の独立と平和のために、また社会進歩のために一貫して積極的に大きな努力をささげてこられました。真摯なマルクス主義者として、河上肇先生以来の経済学部の良い伝統である一途に真理を追求し、どんな困難にも屈せずそれを実践していくという理論と実践の正しい統一を志してこられた先生。私達は、このようなすばらしい先生をもったことを大きな誇りに思います。私達は、先生の学問に対するおすがたに心からの敬意を抱くと同時に、そこから充分に多くのことを学びとらねばならないと決意しています。

吉村先生。先生は積極的に私達の中に入ってこようとされ、親切に誠意をこめて私達を指導し、援助して下さいました。それは、ゼミに対する指導に顕著だと思います。あるゼミ生はこう言っています。「先生は、僕達の未熟な言い分にもやさしく謙虚に耳を傾けて一生懸命僕達を理解しようとされ、そのためにあらゆる機会をもとようとされました」と。昨年度は経済変動論、今年度は外国経済書講読を通じて、私達は直接に先生の教えを受けることができました。高度に理論的な問題を、私達が理解しやすいように一人一人の学生に噛んで含めるように教えて下さった講義に、私達は心から感銘しました。来年度は経済原論を受け持たれるということだったので、私達は大いに期待していましたのに非常に残念です。

吉村先生。先生はまた、同好会の活動をも深く理解し、協力して下さいました。例えば、春の新入生歓迎会の時には、座談会に出席され、「経済学とは何か」「我々はいかに学ぶべきか」「いかに生きるべきか」等々の新入生及び私達が突き当る最も重大且つ深刻な問題を私達と一緒にあって真剣に考え、指針を与えて下さいました。

このように多方面で先生と接することによって、私達は単に理論を学び、知識を得るだけではなく、正しい世界観を身につけるうえで多くの感化と薫陶を受けました。私達は先生から学んだことを永く忘れることなく勉学に励み、社会進歩を愛し、正義の氣にあふれた良心ある知識人として、また祖国の独立と平和に奉仕する良き日本人として、誠実に力強く生き抜くことこそ、先生の御恩に報いる最良の途であると信じます。

先生。みていて下さい。

私達も、先生に負けないよう頑張ります。

先生に対する深い尊敬と感謝の気持ちをこめて、お別れのことばといたします。

安らかにお眠り下さい。

1966年1月31日

京都大学経済学部在学生代表

同好会委員長 沢田 徹